

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00023

研究課題名（和文）生命倫理学前史・成立史における安楽死論とキリスト教の相剋に関する米英日比較研究

研究課題名（英文）Comparative Study of the Conflict between Euthanasia Theory and Christianity in the Prehistory and Establishment of Bioethics in the US, UK and Japan

研究代表者

大谷 いづみ (OTANI, Izumi)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：30454507

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：COVID-19パンデミックによりJ.F.フレッチャーを主軸とする国内外の調査研究は不可能となったが、これを好機と捉え、本研究を今日の時代状況に再配置して検討した。これにより、生産性の多寡により「ある生」を社会の負担と同定しその存在の抹消により社会の問題解決を図ろうとするメカニズムは、次の現象にも通底することを明らかにした。

第一に、ナチスの安楽死政策が同時代の米国や戦後日本で大衆に知られながらも問題とされなかったこと、第二に、75歳以上の高齢者の安楽死を合法化した架空の日本社会を描いた映画『PLAN 75』（2022）が国内外で評価され、特に日本でリアリティをもって受け取られたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、ナチス政権下の安楽死政策の実態が、同時代の米国や第二次世界大戦後の日本で一般大衆に広く知られながらも問題化されてこなかった現象を明確にし、これをCOVID-19パンデミック及びロシア・ウクライナ戦争、ガザ・イスラエル戦争等の今日的状況に再配置したことにある。これにより、ナチスの安楽死政策と現在の安楽死・尊厳死との関係を考究する本研究の社会的意義は一層リアリティをもつこととなった。

なお、カトリック教会等における聖職者の性加害や米国最高裁の中絶対応など、キリスト教をめぐる社会情勢の急変があり、本研究におけるキリスト教の論点については軽々な言及を控え、今後の課題とした。

研究成果の概要（英文）：The COVID-19 pandemic made it impossible to conduct national and international research on J.F.Fletcher, but I took this as an opportunity to re-position my research in today's contemporary situation. This has revealed that the mechanism of identifying 'certain lives' as a burden on society based on their productivity and attempting to solve society's problems by eliminating their existence is common to the following phenomena. Firstly, the Nazi euthanasia policy not having been considered problematic even though it was known to the public in the USA at the time and in Japan after the war, and secondly, the film PLAN 75 (2022), which depicted a fictional Japanese society that legalised euthanasia for the elderly over 75, being well-received both in Japan and abroad and being perceived as realistic, especially in Japan.

研究分野：生命倫理学・生命倫理教育

キーワード：安楽死 尊厳死 高齢社会 格差社会 『PLAN 75』 ナチス安楽死政策 T4計画 トリアージ

1. 研究開始当初の背景

2016年7月に発生した相模原障害者殺傷事件では、被告が発した「ヒトラーが降りてきた」「重度の知的障害者は安楽死させるべき」との言葉が広く報道され、被告の「優生思想」とともに、ナチス・ドイツ政権下におけるT4「安楽死」計画にもわかに知られるようになった(大谷2016)。しかしながら、これらの現象が現在の安楽死・尊厳死論、まして終末期医療や緩和ケアとは関連して論じられていない現実がある。なぜこのような非連続性が生じたのか。本研究課題の核心的問いはここにあった。

上記の問いをふまえ、本研究では、生命倫理学前史および成立史における安楽死論とキリスト教との相剋からその世俗化にいたる過程を、米英日の安楽死法制化運動と初期ホスピス運動の言説、とりわけ、米国で生命倫理学を先駆的に牽引した神学者にして社会活動家であったジョセフ・フレッチャーの軌跡とその安楽死思想と優生思想に焦点を当てて歴史的社会的な解析を行うこととした。

なお、本研究は、「尊厳死」が「安楽死」と切り分けられてきた戦後日本の安楽死・尊厳死論に関する代表者のこれまでの歴史研究をふまえ、これまでの科研「生命倫理学における安楽死・尊厳死論のキリスト教的基盤に関する歴史的社会的研究(基盤(C)、研究代表大谷いづみ、課題番号21520038)」「生命倫理学・死生学における安楽死・尊厳死論の変容とキリスト教の歴史的社会的影響(基盤(C)、研究代表大谷いづみ、課題番号15K02023)」を発展的に引き継ぐ研究として位置づけられた。

- ・大谷いづみ, 2016, 「生きるに値しない生命終結の許容」はどのように語られたか 日本法学界における「安楽死・尊厳死」論史の一断章, 『現代思想』44(19): 102-113.

2. 研究の目的

上記の背景をふまえ、本研究では、「赤い聖職者」とも呼ばれたフレッチャーの戦前からの来歴とその安楽死論と優生思想の変遷をアメリカ精神史と照合し、これを生命倫理学史における安楽死論とキリスト教との相剋と世俗化の先駆けとして位置づけ、彼とほぼ同時期に日本の優生保護運動と安楽死法制化運動を牽引した太田典礼を参照軸にすることで、生命倫理学前史・成立史における安楽死論とキリスト教の相剋に関する米英日比較を行うことを目的とした。

しかしながら、下記3.に記したように、歴史的な状況変化によって当初の研究方法の変更を余儀なくされたことにより、研究目的を、ナチス・ドイツ政権下の安楽死政策と現在の安楽死・尊厳死論との連続性と非連続性の検討に焦点化することとした。

3. 研究の方法

本研究は、第一に、代表者が感染症に脆弱であることから、2019年度末からはじまったCOVID-19パンデミックにより国内外での移動が極端に制限されて、国外はもとより国内近距離での調査研究もままならなかったこと、第二に、2022年2月にはじまったロシア・ウクライナ戦争、2023年10月のハマス奇襲に始まるイスラエル・ガザ戦争による世界情勢の変化、第三に所属機関の所長の闘病による全学役職就任と前所長の急逝に伴う諸対応という3つの理由により、当初の研究方法の変更を余儀なくされ、以下の方法をとることとした。

- (1) フレッチャーコレクションをはじめ、米英や日本国内現地でなければアクセスできない一次資料の蒐集と解析は一端措き、自宅からインターネットや郵送で入手可能な資料の蒐集につとめ、これまで入手してきた資料とあわせて解析にあたった。
- (2) 急速に普及した映像資料の多様化を好機とし、時代状況に関わる多様な資料の蒐集と蓄積を行った。
- (3) 本研究の意義を、COVID-19パンデミック下の「例外状態」、さらにはロシア・ウクライナ紛争、イスラエル・ガザ戦争という「戦時」の常態化という現在の文脈に再配置し、記録と分析に当たった。
- (4) COVID-19パンデミックは、ECMOがトリアージの対象となったこととあわせて、ポリオとの類似性が指摘されてきた。代表者は、乳児期にポリオに罹患しその後遺症による両下肢障害をもつことをふまえ、本研究をオートエスノグラフィックな観点から捉え直すこととした。

4. 研究成果

本研究の成果を以下に列挙する。

- (1) ナチス・ドイツ政権下での T4「安楽死」計画最初期の様子は、ドイツ特派員であったウィリアム・シャイラーによって『ライフ』誌や『リーダーズ・ダイジェスト』誌で報じられ、シャイラーの『ベルリン日記』がベストセラーになるなど、第二次世界大戦参戦前の米国で広く大衆に知られていたこと、日本では、第二次世界大戦後まもなく北杜夫の「夜と霧の隅で」が芥川賞を受賞したほか、人気少女マンガ家によりマンガ化されて何度も再版されてきたことを取り上げ、いずれもとくに問題化されなかったことを明らかにしたうえで、これらの史実を、COVID-19 パンデミックで起きている現象にてらして検討した(大谷 2021)。
- (2) COVID-19 パンデミック直前に武漢で開催された障害学国際セミナー2019、オンラインによる障害学国際セミナーなどの国際会議のほか、イギリスと韓国をむすんでオンラインで行ったインタビューにより、安楽死・尊厳死言説が障害者・難病者にとって、とりわけ欧米の高等教育機関での留学経験をもつ知識層にとって、アンビバレントなものである感觸を得た。この点は、さらに実証的な考究を続ける必要がある。
- (3) 安楽死・尊厳死をとりあげた映画作品や演劇、ドキュメント等の蒐集・整理を継続し、その一部を、安楽死・尊厳死編成史に位置づけた。75 歳以上の高齢者の死の選択を合法化した近未来の日本社会を描いた『PLAN 75』(2022、日仏比嘉)はそのひとつに位置づけられるものの、他の作品群との異同を検討し、一線を画するものであることを指摘した(大谷 2022)。また、早川千絵監督を招いて上映会&トークイベントを開催し、作品のテーマに鑑みて車いすの移動ルートを確認し情報保障(文字通訳・手話通訳)を担保したハイブリッドのトークイベントを開催し、本研究のアウトリーチ活動とした。
- (4) 本研究におけるキリスト教のかかわりについては、大谷(2021)でその一部に触れるに留まった。この数年、カトリック教会等を揺るがしている聖職者による性加害、中絶をめぐる米国最高裁の判例解釈の変更など、世界規模での急変があり、本研究課題と無縁ではない。したがって、本研究におけるキリスト教の論点については、これらの現象もふくめて、今後の課題とした。
- (5) 本研究の成果発表にあたっては、「誰一人取り残さない」ことを念頭に、情報保障(文字通訳・手話通訳)とハイブリッドによる移動アクセシビリティの担保に留意した。特に(3)の『PLAN 75』上映会&トークイベントでは、障害当事者に限らず、参加者からの評価も高く、代表者の所属大学で「グッドプラクティス」に採択された。

・大谷いづみ, 2021, 「歴史の忘却と連続性 語られてきたナチス「安楽死」政策とコロナ禍の現在」『新薬と臨牀』70(12): 59-66.

・大谷いづみ, 2022, 「解説 それぞれの「良い死/唯の生」, 立岩真也『良い死/唯の生』筑摩書房(ちくま学芸文庫), 571-581.

以上の研究成果は、「5. 主な発表論文等」に記載したように、国際学会を含む関連諸学会・研究会報告や国際誌を含む学術論文・図書などのほか、教育・福祉・行政の研修会や一般市民向けのセミナー・図書などを通してより広汎な対象に還元することができた。また、「その他」に記載したように、高校生からのインタビューやメディアからの取材や寄稿要請などがあり、広く一般市民に成果還元することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 大谷いづみ	4. 巻 6
2. 論文標題 分断ではなく架橋へ 何らかの「困りごと」をもつ学生と何らかの「困りごとを」もつ教員支援の未来	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館生存学研究	6. 最初と最後の頁 87-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00017677	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大谷いづみ	4. 巻 6
2. 論文標題 開会挨拶	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館生存学研究	6. 最初と最後の頁 49-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00017669	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 川端美季・大谷いづみ	4. 巻 6
2. 論文標題 特集趣旨	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館生存学研究	6. 最初と最後の頁 45-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00017668	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大谷いづみ	4. 巻 なし
2. 論文標題 ただ生きて存（あ）る命がリスペクトされる未来を創りたい	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ハビネットファントム・スタジオ編 『PLAN 75』（映画パンフレット）	6. 最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大谷いづみ	4. 巻 70 (12)
2. 論文標題 歴史の忘却と連続性 語られてきたナチス「安楽死」政策とコロナ禍の現在	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新薬と臨牀	6. 最初と最後の頁 59-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷いづみ・同朋編集部	4. 巻 72 (12) 通巻836
2. 論文標題 生きて存るを学ぶ「生存学」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 同朋	6. 最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Izumi OTANI	4. 巻 13
2. 論文標題 The Covid-19 Crisis and the Experience of Polio Survivors: Life Before and After a Pandemic	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Ars Vivendi Journal	6. 最初と最後の頁 47-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大谷いづみ・川端美季	4. 巻 7
2. 論文標題 特集趣旨	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立命館生存学研究	6. 最初と最後の頁 85-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34382/0002000395	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大谷いづみ・川端美季	4. 巻 7
2. 論文標題 講演1「障害のある教員」の職場復帰のプロセスと課題」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立命館生存学研究	6. 最初と最後の頁 89-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/0002000394	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大谷いづみ	4. 巻 52(3)
2. 論文標題 立岩真也さんと生存学のこと	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 現代思想 総特集 立岩真也1960-2023	6. 最初と最後の頁 223-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計26件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 大谷いづみ・川端美季
2. 発表標題 『PLAN 75』上映会&トークイベント報告（ポスター報告）
3. 学会等名 2022年度人間科学研究所年次総会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大谷いづみ・川端美季
2. 発表標題 教育におけるアクセシビリティと障害学生の存在が拓くSDG's社会の未来
3. 学会等名 立命館大学デザイン科学研究センター第11回革新的意味創出研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大谷いづみ・川端美季
2. 発表標題 「障害のある教員」の職場復帰のプロセスと課題」
3. 学会等名 立命館土曜講座「「障害のある先生が仕事を続けるということ 障害と教育の交わる場所」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大谷いづみ (シンポジスト)
2. 発表標題 『PLAN 75』トーク・セッション
3. 学会等名 『PLAN 75』上映会&トークイベント
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大谷いづみ/OTANI Izumi
2. 発表標題 ラウンドテーブル：東アジアにおける障害者の地域における自立生活 座長報告
3. 学会等名 障害学国際セミナー 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大谷いづみ・川端美季
2. 発表標題 高等教育研究機関におけるハンドル形電動車いす利用者の移動アクセシビリティ 欧米韓日を中心に
3. 学会等名 2021年度人間科学研究所年次総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大谷いづみ
2. 発表標題 障害の経験を共有することの困難（と希望）（「閉会の挨拶」に代えて）
3. 学会等名 立命館大学大学院先端総合学術研究科院生プロジェクト「障害者と労働」研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大谷いづみ
2. 発表標題 分断ではなく架橋へ（情報保障のいまとこれから 生存学研究所の取り組み）
3. 学会等名 生存学研究所「支援テクノロジー：アクセシビリティ・プロジェクト」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大谷いづみ
2. 発表標題 安楽死・尊厳死論の歴史と宗教 「わたし・たち」の物語を語り直すために
3. 学会等名 東本願寺教学研究「生老病死と現代」所内研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大谷いづみ
2. 発表標題 「忘れられた感染症、ポリオ」のサバイバーとして聴く（閉会の挨拶に代えて）
3. 学会等名 立命館大学生存学研究所オンラインセミナー「新型コロナウイルス感染症と生存学」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大谷いづみ
2. 発表標題 「移動・情報／教育・労働のアクセシビリティ <障害児・学生>と<障害のある教員>の経験から」
3. 学会等名 立命館大学生存学研究所「土曜講座代替企画 ウィズコロナ／アフターコロナのアクセシビリティ」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大谷いづみ/OTANI Izumi
2. 発表標題 “ The Covid-19 Crisis and the Experience of Polio Survivors: Life Before and After a Pandemic ”
3. 学会等名 障害学国際セミナー2020/East Asia Disability Studies Forum (EADSF) 2020 Webinar on COVID-19 and Persons with Disabilities in East Asia (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大谷いづみ
2. 発表標題 「 「<間>の生」を聴く／ 「<間>の生」を語る」 「わたし・たち」の物語のために
3. 学会等名 ゲノム問題検討会議. 「緊急ZoomセミナーPart2「いのちを語る：安楽死・尊厳死言説といのちの学び」」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大谷いづみ
2. 発表標題 優生保護法と安楽死・尊厳死運動史
3. 学会等名 第2回生命倫理政策史研究会 優生保護法史の多角的検討
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大谷いづみ/OTANI Izumi
2. 発表標題 障害と安楽死・尊厳死言説 高齢化社会における「死ぬ権利」と「死ぬ義務」/Disability and Discourse on Euthanasia/Death with Dignity: 'Right to Die' and 'Duty to Die' in an Aging Society
3. 学会等名 障害学国際セミナー2019/The 9th East Asia Disability Studies Forum (EADSF) 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大谷いづみ・川端美季
2. 発表標題 ハンドル形電動車いすの移動アクセシビリティ 英米仏独伊韓の実態調査 (ポスター報告)
3. 学会等名 障害学会第16回京都大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安田智博・ユ ジンギョン・高雅郁・大谷いづみ
2. 発表標題 日韓ユニバーサルツーリズムにおける移動困難者とサポーターによる実践報告
3. 学会等名 シンポジウム「アクセシビリティと“??” 生活・空間・モノ・社会デザイン、そして実践から考える
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 大谷いづみ
2. 発表標題 笑顔に隠れた沈黙・愚痴としてのみ語られること (閉会の挨拶)
3. 学会等名 シンポジウム「アクセシビリティと“??” 生活・空間・モノ・社会デザイン、そして実践から考える
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 大谷いづみ, 川端美季ほか
2. 発表標題 立命館アジア太平洋大学・別府における車いすの移動アクセシビリティ (ポスター報告)
3. 学会等名 立命館大学教育開発DX/ピッチ (最終報告会 D.I.G.)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 大谷いづみ, 川端美季
2. 発表標題 『PLAN 75』上映会&トークイベントとアクセシビリティ: 「障害」支援と教学の未来を拓く教職協働の試み (ポスター報告)
3. 学会等名 立命館大学教育開発DX/ピッチ (最終報告会 D.I.G.)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 大谷いづみ
2. 発表標題 若き日の石川憲彦先生との出会い (開会の挨拶に代えて)
3. 学会等名 立命館大学大学院先端総合学術研究科院生プロジェクト「少数者と教育」研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大谷いづみ
2. 発表標題 脆弱性と社会的排除を生きること: ベケット先生を迎えて (開会の挨拶に代えて)
3. 学会等名 立命館大学生存学研究所 アンハラッド・ベケット先生招聘研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 OTANI Izumi et KAWABATA Miki
2. 発表標題 Report on the PLAN 75 screening and discussion event (ポスター報告)
3. 学会等名 障害学国際セミナー2023/The 9th East Asia Disability Studies Forum (EADSF) 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大谷いづみ
2. 発表標題 コミュニケーションペーパーに託された声を聴く (開会の挨拶に代えて)
3. 学会等名 立命館大学大学院先端総合学術研究科院生プロジェクトMMD研究会 福田暁子氏公開研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大谷いづみ
2. 発表標題 「生命倫理」から見える現代社会 学問と現場、理論と実践を往還する
3. 学会等名 全国学生社会科学系研究会連絡会議 夏季ゼミ 情勢講演会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大谷いづみ, 川端美季
2. 発表標題 『PLAN 75』上映会&トークイベント報告 (ポスター報告)
3. 学会等名 AHEAD JAPAN CONFERENCE 2023
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 立岩真也 著 大谷いづみ 解説	4. 発行年 2022年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 614
3. 書名 『良い死/唯の生』 「解説 それぞれの『良い死/唯の生』（大谷執筆分）	

1. 著者名 安藤泰至、島園進、川口有美子、大谷いづみ、児玉真美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晶文社	5. 総ページ数 264
3. 書名 見捨てられる<いのち>を考える 京都ALS囁託殺人と人工呼吸器トリアージ	

1. 著者名 伏木信次・櫻則章・霜田求編、大谷いづみ・位田隆一・田代志門・永田まなみ・齋藤有紀子・中筋美子・会田薫子・有馬斉ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金芳堂	5. 総ページ数 280
3. 書名 『生命倫理と医療倫理 第4版』 「第13章 安楽死と尊厳死」（大谷執筆分）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>(1) 本研究結果が目にとまり、立正大学文学部、東京大学教育学部附属高校等のゲスト講師や、探究活動の一環で高校生からのインタビューが何件もあった。死生に関わる問題の個性性と普遍性を往還する研究成果が、多層的な生きづらさに直面している若い世代への循環的な社会貢献となった。</p> <p>(2) 本研究に関わった取材で以下のコメントおよび寄稿記事が掲載・放映され、アカデミアとは距離のある幅広い層へのアウトリーチ活動となった。</p> <p>大谷いづみ「生きたい気持ち守れ」（相論対論 再燃する「安楽死」議論）『中外日報』2020年8月23日</p> <p>大谷いづみほかコメント「殺される脅威」ない社会へ 安楽死巡り命の尊厳議論：ゲノム問題検討会議セミナー」『中外日報』2020年10月16日</p> <p>大谷いづみ「随筆随想（1）死生と関わる主題 通奏低音のように響く」『中外日報』2021年10月1日</p> <p>大谷いづみ「随筆随想（2）なぜ？という問い 番組が与える影響懸念」『中外日報』2021年10月8日</p> <p>大谷いづみ「随筆随想（3）「わきまえ」の分水嶺 端的に表れる社会のひずみ」『中外日報』2021年10月15日</p> <p>大谷いづみ「随筆随想（4）「謝罪文に思う 加害 被害間に越えがたい溝」『中外日報』2021年10月22日</p> <p>大谷いづみ「「安楽死」論の拡大懸念」『毎日新聞』2021年12月1日</p> <p>早川千絵・大谷いづみほかコメント「架空の制度で生を問う 「75歳以上は安楽死可能」立命館大で映画上演」『中外日報』2023年1月18日</p> <p>大谷いづみほか「障害ある教員の職場復帰を議論（立命館土曜講座）」『中外日報』2023年1月18日</p> <p>大谷いづみ・川端美季@生存学研究所「クイズ#ふつうアップデート 大学SP(2)」NHK・Eテレ『バリバラ』2023年10月6日0A</p> <p>大谷いづみほか「映画PLAN75の「未来」避けるには「簡単な処方箋はなくても」『朝日新聞』「8がけ社会」2024年1月13日</p> <p>谷田朋美「埋もれた声を拾う「生存学」立岩真也さん」コメント『毎日新聞』2024年2月5日</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------